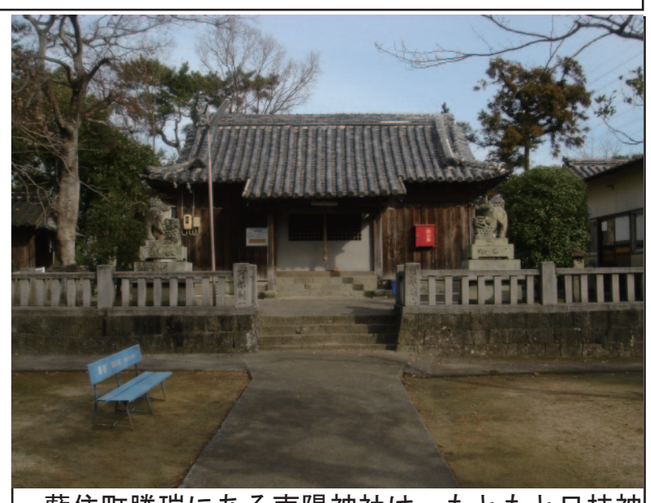
発掘だより

細川澄賢を知っていますか？

細川澄賢 阿波入国から 500 年記念号

藍住町に残る細川澄賢の足跡はあくまでも伝承の域を出るものではなく、全国的にみても知っている方が少ないと思われます。約 500 年の時をへだてて、名を残しているこの人物に今回の発掘だよりでは目を向けてみます。

藍住町勝瑞にある地福寺の境内には、細川澄賢の墓と伝えられる永正十八（1521）年の紀年銘入りの五輪塔が残っています。



藍住町勝瑞にある南陽神社は、もともと日枝神社と呼ばれ、細川澄賢が阿波入国（1508 年）とともに、澄賢が信仰していた大山咋神（オオヤマクイ神）をこの地に祀ったと伝わっています。

細川澄賢（弥九郎）

細川澄賢の『澄』の字は、11 代将軍・足利義澄の偏諱で、『賢』の字は典厩家の者に付く字です。官位は右馬頭、又は右馬助。澄賢の父は典厩家の細川政賢で、両細川家の乱と呼ばれる細川京兆家の跡目争いで細川澄元方につきます。母は細川義春の娘で、同じく義春の子である澄元は阿波細川家より京兆家に養子にはいった人物で、澄賢の伯父にあたります。

これまでの澄賢像	澄賢は典厩家でありながら和泉守護として語られたり、高国方として語られているものも見られます。
要因 1	当時の記録（日記）などに、人物名が書かれていないことが多いこと。右馬助などの官位や和泉守護などの役職、典厩など家名で書かれており、人物の特定に様々な見解が生まれます。
要因 2	両細川家の乱の頃、澄元・晴元方と高国方の両陣営に典厩家、和泉守護が存在していること。
要因 3	父・政賢が和泉下守護家と血縁関係があるとされることや妹（姉？）が高国の室となっていること。
要因 4	『後法成寺関白記』において、細川弥九郎という人物が度々、登場し近衛邸を訪ねていること。

高国派の典厩家尹賢、和泉守護高基・勝基、澄元派の典厩家政賢・澄賢・晴賢、和泉守護元常の説（『細川澄元（晴元）派の和泉守護細川元常親子について・岡田謙一』）や阿波に残る澄賢の墓碑や伝承に照らし合わせてみると

南陽神社の伝承によれば、1508 年に阿波へ澄賢が入国したと云われています。文献などで澄賢が阿波に入国した時期などは、残っていませんが、この年に細川澄元・三好之長・足利義澄が細川高国に京を追われ、近江に逃れます。澄賢も阿波細川家の守護所があったと考えられている勝瑞に入り、反攻の時を待ったのかもしれません。ただ、父・政賢は足利義澄が京を追われた後もしばらくは在京していたようで、近衛尚通の日記『後法成寺関白記』に、その名が見られます。その後の舟岡山の戦いで父・政賢が亡くなります。『後法成寺関白記』に登場する細川弥九郎は、舟岡山の戦いの日にも近衛邸を訪ねて戦談義をし、また翌日には尹賢、弥九郎等が訪れ風呂に入っています。その後も高国や尹賢と行動していることから、この時期を生きた細川一族でもう一人、弥九郎を名乗っていたとされる人物・細川高基だと思われます。尹賢とは兄弟であり、高国により後に和泉守護となった人物です。

近衛尚通は、高国方と密接な関係をもっており、不確かながら後に近衛尚通の子・稙家に嫁いだ久我慶子は高基の娘とする説もあります。澄賢は、この高基と同一視されている部分が多かったと考えられます。澄賢は阿波入国後の 13 年間を阿波を中心に晴元方と活動していたのではないでしょうか？政賢・澄元・三好之長らの死後、細川元常とともに澄賢が晴元派の中心となっていったと考えられ、足利義稙が高国と対立し京を出奔した際には、反高国派として軍勢催促の書状をだしており、義稙の再起に動いていたようです。残念ながら晴元方が高国方を破って畿内へと返り咲く前に澄賢は亡くなってしまいますが、その意志は子供の晴賢が継いだと考えられます。『細川両家記』には大永六（1526）年に阿波より先陣として典厩等が堺へ上陸したとの記録がみられますし、後に細川晴元と三好長慶とが対立した折には、晴元方にその名がみられます。政賢・澄賢・晴賢の典厩家三代は阿波細川系の澄元・晴元の京兆家と命運を供にしたと言えるのではないでしょうか？それが細川澄賢が阿波の地で名を残している理由とも思えるのです。

澄賢の死亡時期	五輪塔の形状からは、後年に造られたものの可能性も考えられますが、五輪塔に刻まれた年号永正十八（1521）年が八月二十三日に大永と改元される年であり、改元前の年号が使われている点では信憑性を感じます。

1506（永正三）年	明日右馬助（細川政賢）息（細川澄賢）元服云々。『後法成寺関白記・永正三年七月三日』	
1508（永正五）年	四月上旬、細川高国に追われ細川澄元・三好之長、近江に出奔。続いて四月十六日に足利義澄も近江に出奔。御台を細川政賢宅に隠す。 細川民部少輔（高国）上洛～大樹（足利義尹）居住有し大心院在所并右馬助（政賢）許令一見～『後法成寺関白記・永正五年六月七日』 去夜、典厩（政賢）在所火事～『後法成寺関白記・永正五年十二月十二日』	細川澄賢、阿波に入国。 日枝神社（現・南陽神社）の地に大山咋神を祀る。〔南陽神社伝承〕
1511（永正八）年	細川澄元方として、右馬頭政賢・和泉守護（元常）、和泉へ出兵。船岡山合戦で細川高国・大内義興に破れ、政賢戦死。『細川両家記』 細川右京太夫（高国）・畠山修理太夫（義元）・大内左京太夫（義興）以下責寄間、船岡山陣即破了、～彼方遊佐インソウ（順盛）、右馬助（政賢）、和泉守護（元常）以下ツキクツス也、今日ウタルル人々、右馬助并被官人不知数、～細川弥九郎（高基）・萠庵等来、陣義種々令雑談『後法成寺関白記・永正八年八月廿四日』	
1513（永正十）年	和泉守護（高基）始而出仕～『後法成寺関白記・永正十年一月廿四日』	
1518（永正十五）年	大内義興、周防に帰国。 今日京兆（高国）・典厩（尹賢）摂州下向云々、『後法成寺関白記・永正十六年八月十六日』 和泉守護（高基）、明日泉州下向、『後法成寺関白記・永正十六年八月十九日』	
1520（永正十七）年	三好之長父子刑死。細川澄元病死。	
1521（永正十八・大永元）年	足利義稙、細川高国と対立し京より出奔『二水記・大永元年三月八日』（堺へ後、淡路）。畠山尚順・阿波衆ら馳せ参じる。 四月三日付で澄賢が軍勢催促の書状を出している。『古文書写』（細川澄元（晴元）派の和泉守護細川元常親子について・岡田謙一）	細川澄賢没。〔地福寺内の細川澄賢の五輪塔（伝承）〕 龍華院殿右典厩 蘭英道秀大居士 永正十八年八月廿二日 『大日本史料第九編之十三』
1526（大永六）年	典厩（細川）尹賢が讒言により香西元盛を謀殺。 細川晴元（澄元の子）方、阿波より先陣として典厩（細川晴賢？）・和泉守護（細川元常？）・三好勝長・三好政長、堺へ上陸。『細川両家記』	
1531（享禄四）年	細川高国の反攻にあい、細川晴元が三好元長（堺幕府内の勢力闘争に敗れ阿波に帰国していた）に助力請う。 二月、元長堺へ上陸。三月、細川持隆の兵八千堺へ上陸。 〔同五年（四年？か）壬辰閏五月十三日に阿波衆境（堺）より出張也。典厩（細川晴賢？）。香川。中務丞。築嶋に陣取給ふ・・・・。〕『細川両家記』 大物崩れは、高国方の敗戦に終わり、高国側の戦死者として〔常植（高国）方和泉守護（細川勝基）殿〕『細川両家記』とある。 細川高国、尼崎で自刃。七月、細川尹賢、木沢長政に捕らえられ殺害される。	

特別付録 細川家ちょこっと解説

細川氏略系図

足利氏略系図

～ちょこっと関話～　10 代将軍・足利義稙は、細川政元に将軍職を廃され幽閉されますが、越中に逃れます。その後、周防の大内義興を頼ります。政元が暗殺され、細川澄元と細川高国が対立すると義興と共に高国を支持し、将軍に返り咲きます。ただ、義興の帰国後、高国との関係も悪化し、京都を出奔、再起を試みますが叶わず、阿波の撫養で亡くなりました。

細川家系列

細川家は清和源氏足利氏の庶流で義季が細川氏を称したことに始まります。その後、足利尊氏の挙兵に従い、勢力を伸ばしました。7 代・頼之は管領となり足利義満を後見し、一族の領国は 8 カ国に及びます。以後、京兆家は、代々管領に任ぜられ、斯波氏・畠山氏とともに三管領の一つに数えられることとなります。

阿波細川家

詮春を祖とする細川宗家の分家。ただ、細川庶流家の中では別格で室町幕府の相伴衆を務める家柄で、上屋形（京兆家）に対し、阿波細川家は下屋形（阿波屋形）と呼ばれました。後に被官の三好氏の勢力が拡大し、持隆は三好義賢により殺害されます。持隆の子眞之は、義賢の子・長治を倒すものの、長治の弟・十河在保に攻められ自害しました。

京兆家（上屋形）

細川宗家で代々、室町幕府の管領職に任ぜられ、摂津・丹波の守護となりました。京兆とは、当主が代々任ぜられていた官位・右京太夫の唐名です。

典厩家

細川宗家の分家で細川持賢を祖とし、摂津欠郡守護に任じられました。典厩とは、当主が任ぜられていた官位右馬頭（または右馬助）の唐名です。細川庶流家の中でも京兆家と関係が深く有力な分家でした。

上京遺跡（京都市上京区）で室町時代後期の屋敷跡の遺構が出土し、典厩家の屋敷跡と考えられています。

典厩家

細川政賢

典厩家・細川政国（細川満国を祖とする分家＝野州家からの養子）の子（和泉守護の次男で政国の養子とする説も）。両細川氏の乱では澄元方として、和泉守護細川元常とともに先陣として和泉に進出します。そして、舟岡山の戦いで細川高国・大内義興らに敗れ戦死しました。澄賢の母は細川義春の娘とされます。

細川晴賢

典厩家・細川澄賢の子。三好長慶と三好政長の対立から、1549（天文十八）年に江口の戦いがおこります。晴賢は当時、芝島城におり、細川晴元・三好政長方につき、長慶の軍に攻められ、落城しています。政長が戦死し、晴元は近江に逃れますが晴賢もそれに帯同しました。

細川尹賢（尹元）

細川満国を祖とする分家（野州家）の出。細川澄元方であった細川政賢は摂津欠郡守護を細川高国によって解任されます。政賢の戦死後、典厩家と摂津欠郡守護は尹賢が継ぐこととなります。（細川高国と尹賢は繋がりが強く、高国の従兄弟との説もあります）、両細川氏の乱では高国方に属しました。この尹賢という人物は、なかなか曲者で、後に政敵であった高国の被官香西元盛を讒訴し謀殺します。これは高国政権崩壊の要因となっていきます。尹賢は 1531 年の大物崩れと呼ばれる戦で、高国側で参戦（この戦以前に捕えられ、細川晴元に降ったとも云われます）。高国は、この戦いのすぐ後に捕らえられ自決します。尹賢自身も、同じ年に捕えられ殺されることとなります。洛中洛外図屏風（歴博甲本）の典厩家には尹賢と思われる人物も描かれています。

澄元・晴元派

細川元常

細川頼長を祖とする和泉上守護家。父は細川元有、母は細川成之の娘で細川澄元とは、従兄弟にあたります。父・元有が畠山尚順に攻められ自害した折は阿波に居たとも考えられています（吉野川市川田の井上城跡は細川頼長が館としていたとされ、代々和泉上守護家の所領か？元常は永正元年に京都にあがったため代官を置いたとされ、井上城の鎮守・八幡神社には天文二（1533）年の紀年銘のある棟札に『御檀那播磨守元常御代丹治右京亮常直』とあります）。両細川氏の乱では、細川政賢・澄賢父子と共に細川澄元・晴元派の中心として活躍します。澄元が細川高国に敗れた折には、共に阿波に入っており、永正八年三月に阿波より淡路に渡海しています。舟岡山の合戦後も阿波へ入国し、澄賢と共に晴元派として活動していきます。

参考文献

『戦国期畿内の政治社会構造』小山靖憲編
『戦国期歴代細川氏の研究』森田恭二
『大日本古記録・御法成寺関白記』
『大日本古記録・二水記』
『大日本史料』
『群書類従』
『群書系図部集』
『系図纂要』
『日本城郭体系』

系図・年表・人物の特定などは諸説があり、ここに書いた物は一例です。

問い合わせ先
藍住町教育委員会　社会教育課
勝瑞発掘現場事務所
TEL・FAX（088）641-3466
URL:http://www15.ocn.ne.jp/~shouzui/
E-mail:syugomachishouzui@air.ocn.ne.jp

この時期の簡単な流れと人間関係

両細川氏の乱（1506 年～）

Victory		
細川澄元		細川澄之
細川高国		香西元長
三好之長	VS	薬師寺長忠
細川政賢		一宮兵庫助
細川尚春		

細川宗家の跡目争い。13 代政元には実子が無く、公家の九条政基の子・澄之、阿波細川家から澄元を養子としました。澄元が後継に選ばれましたが、澄之方の香西元長が政元を殺害し、澄之が家督を継ぐことになりますが 2 ヶ月と続かず、澄元がとって代わることとなります。

両細川氏の乱（1508 ～）

Victory		
足利義澄		足利義材
細川澄元		細川高国
三好之長	VS	大内義興
細川政賢		細川尹賢
細川元常		畠山義元
細川尚春		

細川澄元のもと、専横が目立つ三好之長に対して反発する勢力（高国ら）が大内義興を陣営に引き入れ、澄元以下を京より駆逐します。このとき、之長の子・長秀没。再起を計った澄元方は再び上洛を目指すものの舟岡山の戦いで敗れ細川政賢が戦死しています。澄元らが再び京へ上るのは大内勢が周防へ戻ってからとなります。

両細川氏の乱（1519 年～）

Victory		
細川澄元		細川高国
三好元長	VS	浦上村宗
赤松義村		内藤貞正
		六角定頼

大内勢の帰国後、播磨の赤松義村の加勢もあり、澄元勢は京を奪還します。京を追われた高国らは六角定頼らと再び攻め上がります。このとき澄元が病のため澄元方は士気があがらず勝負にならなかったといわれています。捕らえられた三好之長とその子（芥川長光・長則）らは切腹させられました。

両細川氏の乱（1526 年～）

Victory		
足利義維		足利義晴
細川晴元		細川高国
三好元長	VS	細川尹賢
波多野稙通		武田元光
柳本賢治		
細川元常		
細川晴賢？		

細川尹賢による香西元盛の謀殺により丹波から火の手が上がります。高国らは近江に逃れ、晴元らは堺に政権を樹立します。ただ堺幕府内では柳本賢治と三好元長が対立し、元長は阿波へと帰国します。

大物崩れ（1530 年～）

Victory		
足利義維		足利義晴
細川晴元		細川高国
細川持隆	VS	浦上村宗
三好元長		細川尹賢？
三好政長		薬師寺国盛
薬師寺国盛		赤松政村
赤松政村		
細川晴賢？		

細川高国は浦上村宗の協力で反抗を開始します。晴元方は対抗しきれず、元長に助力を請います。細川持隆も兵を出し、村宗が父の仇であった赤松政村が寝返り、晴元方が勝利します。高国は尼崎で捕らえられ切腹させられました。

両細川氏の乱（1548 年～）

Victory			Victory
足利義輝	伊丹親興	細川氏綱	十河一存
細川晴元	三好政長	遊佐長教	安宅冬康
細川元常	三好政勝 VS	三好長慶	
細川晴賢	香西元成	三好義賢	
茨木長隆		三好長逸	

父・元長を一向宗・細川晴元に殺された長慶だったものの、その後、対立した一向宗と晴元の調停をまとめ、幕府に返り咲きます。その後、長慶は晴元方として高国の後継を称する細川氏綱と戦うものの、同族・政長との対立もあり、氏綱と同盟を結びます。氏綱方は江口の合戦で晴元方を破り、政長は戦死し、晴元政権は崩壊します。